

## 【Notes and Communications】

# 2017年のアダム・スミス像

三好宏治

## I はじめに

本稿で取り上げる以下の4冊のうち、田中の著作のみが研究書であり、残り3冊は一般向けの著作である。田中が1924年、高が1947年、井上と根井が1962年生まれである。世代もそれぞれの専門分野も関心も異なる。にもかかわらず、スミスの名をタイトルに冠していずれも2017年に刊行されたのは興味深い。評者は4冊を同時に紹介することで、2017年の日本でどのようなスミス像が語られていたかを俯瞰したい。

- [1] 田中正司『増補改訂版 アダム・スミスの倫理学—『哲学論文集』・『道徳感情論』・『国富論』』御茶の水書房、2017年、xx+474+7頁。
- [2] 高哲男『アダム・スミス—競争と共感、そして自由な社会へ』講談社、2017年、285頁。
- [3] 井上義朗『「新しい働き方」の経済学—アダム・スミス『国富論』を読み直す』現代書館、2017年、229頁。
- [4] 根井雅弘『アダム・スミスの影』日本経済評論社、2017年、ix+174頁。

## II 田中正司『増補改訂版 アダム・スミスの倫理学』[1]

長年にわたり我が国のスミス研究を牽引してきた著者が、20年前に上下巻の分冊で刊行した『アダム・スミスの倫理学』（御茶の水書房、1997年）を合本して増補改訂したのが本書である。間奏章として『『哲学論文集』と『道徳感情論』』が新規に書き下ろされている。

以下、『道徳感情論』を *TMS*、『国富論』を *WN* と略称する。そして、*TMS* 初版から *WN* 初版までのスミスを「前期スミス」、また、*WN* 第3版から *TMS* 第6版までのスミスを「後期スミス」と評者は本稿で呼ぶことにする。

さて、*TMS* 初版で展開された同感理論・観察者理論は未熟な論理であり、論理の欠陥を乗り越えたスミス道徳哲学の完成形が *TMS* 第6版であるとするのが一般的な解釈だろう。この解釈では、「前期スミス」と「後期スミス」で論理の洗練はあっても、思想的立ち位置は同じである。一方、著者は「前期スミス」と「後期スミス」との間にずれがあると論じる。

*TMS* 初版のスミスは自然の欺瞞論を展開しているが、これはカルヴィニズム的予定説に近い

と著者は考える。神の定めた秩序を認識できないが故に、人間は自然のルールから逸脱する。だが、「見えざる手」に導かれるが如く、正しい道へと戻される。この自然観は *WN* 初版へと引き継がれ、*WN* 初版のスミスは自然の欺瞞の働きによって商業社会はよりよくなると期待している。ところが、*TMS* 第 6 版になるとスミスの逸脱行動論にずれが見出される。人間はその弱さ故に正しい道を踏み外す。だからこそ、世論に惑わされない胸中の裁判官が重要視されることになり、適宜性を保つための人格的陶冶が必要となる。これは、初版で否定されたはずのストア派的な賢人観である。

この立場のずれの契機を、著者はスミスの商業社会の認識変化にあるとし、*WN* 第 3 版の改訂にその根拠を求める。初版のスミスは商業社会の未来について楽観的であり、虚栄心もたらす競争を肯定的に捉えている。だが、*WN* 第 3 版のスミスは、商人の貪欲さを批判している。商業社会がもたらす道德感情の腐敗は *TMS* 初版の自然の欺瞞理論では解決することができず、市場参加者の人格陶冶とストア的な賢人政治家の登場を要求する。*WN* 第 3 版で市場への信頼を失ったスミスは、*TMS* 第 6 版で世論にも懐疑の目を向けるようになった。だからこそ、*TMS* 第 6 版では、初版と異なり人格育成のための実践道德哲学の完成に重点が置かれたのである。

自然な社会法則を解き明かそうとする「前期スミス」は、「見えざる手」による修正力に期待するカルヴィニズム的立場にあった。「後期スミス」は「見えざる手」と自然の作用に全幅の信頼を置くことができなくなっていた。ストア派的議論を入れることで理論体系に矛盾が生じる危険にさらしてでも、晩年のスミスは市場の腐敗という現実に対処しようとした。この態度に社会科学者の良心とあるべき姿を著者は見出し、現代の我々もスミスの現実と戦う姿勢に学ぶべきと著者は結論する。

*TMS* と *WN* をどう統一的に解釈するかをアダム・スミス問題と呼ぶ。アダム・スミス問題にスミスの思想的変遷という時間軸を組み込むことで、著者はスミスの倫理観の逆転と変質を発見した。これは、今なお学び多き著者のスミス研究の画期性である。スミスについて何事かを書こうとする研究者の書架に常備しておく価値が本書にはあるだろう。

### III 高 哲男『アダム・スミス』[2]

本書は 2 部構成であり、序章でスミスの小伝と哲学論文集が解説されたのちに、第 I 部が *WN*、第 II 部が *TMS* の解説となっている。スミスに内在化して再構成することを企図した著者は、スミスを多量に引用することでスミス自身に語らせているという叙述法を取っている。著者自身の解説は最小限にとどめられた結果、本書はスミスの解説書というよりも *WN* と *TMS* の縮約書としての性格が強くなっている。ゆえに、本書の議論を内在的に追っていくと *WN* と *TMS* の紹介になってしまう。『経済学史研究』の読者に、評者がいまさらスミス自身の議論を紹介する必要はないだろう。

もっとも、スミスの生物学への著者の注目と進化論的補足解説によって、単なる縮約書とは違

う著者の独自性が本書に反映されている。

新古典派経済学は古典物理学をモデルにして作られた。そのため、一般のスミス解説書では、『哲学論文集』のうち「天文学史」が特に重視される。それはスミスがニュートンの方法を称賛しており、新古典派経済学の先祖として彼を位置づけやすいからである。しかし、著者は啓蒙期に発達したもう1つの自然科学である生物学に注目する。スミスの生物学への関心と研究の成果の1つが、生物としての人間の五感の働きや感情について語られている「外部感覚論」である。また、「模倣芸術論」では、人間の感情の起源についてのスミスの見解を知ることができる。スミス研究では、*TMS* の同感理論読解の際にこれらが参照されることはある。だが、一般向けスミス入門で紹介されるのはたいへん珍しい。

著者は *WN* の解説でも分業論と価値尺度論でスミスの生物学的議論に読者の注意を向けさせようとする。分業論で交換性向を持つ人間を他の動物から区別できるかどうかをスミスは検討している。人間には他者の心情をくみ取る同感能力があり、その点でほかの動物と異なることにスミスは気づいていた。そして、著者はスミスの価値尺度論を生命維持に必要なカロリーという視点から読み解こうとする。

また、*TMS* の解説においても、同感能力は他の動物にはない社会集団を形成する哺乳類のみが進化によって身につけたことを著者は強調する。同感理論をダーウィンが高く評価したことや、*TMS* のエミュレーションがヴェブレンに引き継がれていることの指摘は、著者ならではとも言える。快楽を求め不快を避ける合理主義的で功利主義的な人間像では、人間は他の動物と同じになってしまう。スミスの人間像が新古典派的な人間像とは違うと論じる著者は多いが、進化論的読み込みからその結論を導き出すのは極めてユニークである。

*WN* も *TMS* も大著である。縮約書として、スミスの言葉に触れながらその大筋を知ることができることに本書の有用性がある。だが、著者は *TMS* 第6版第7部（初版では第6部）の全体像を解説していない。スミスは第7部で道徳哲学史を整理し、過去と同時代の哲学に対する彼自身の見解を述べている。著者は第7部の学説史の存在を本書で説明していないため、本書の217ページのマンデヴィルや236ページのフランシス・ハチスンへの言及は、スミスの言葉ではなく、著者の言葉であるように誤読する可能性が高い。著者独自の生物学的・進化論的アプローチと含めて、学生に推薦する時には注意を喚起する必要があるだろう。

#### IV 井上義朗 『「新しい働き方」の経済学』 [3]

本書は、スミス自身よりも著者の思想が前面に出た一般向けの啓蒙書である。社会的分業に参加できないものが陥る社会的排除に関する著者の問題意識が存在し、*WN* を脱貧困の書として読み直そうとする面白い試みがなされる。

第1章「『国富論』を読む」でスミスが相対的貧困を認識していたことが確認される。スミスの分業論を読む際にリカードの比較優位を持ち出し、「見えざる手」を投資の順序と説くことに

独自性があるが、本章の大部分は手堅いスミス解釈が提示されている。

第2章「『国富論』は、今日のような市場経済を描いていたか？」では、市場経済と資本主義とは区別すべきだと主張され、その説明ツールとして2つの競争論が持ち出される。一方は、収穫逓減を前提とするミクロ経済学の教科書で描かれるコンペティションとしての競争である。そして、もう一方は、収穫逓増を前提とするエミュレーションである。スミスはこの2つの競争論を注意深く使い分けており、スミスが想定した市場経済の原風景と適格的なのは前者であると著者は主張する。

第3章「株式会社の起源：株式会社は『国富論』を終わらせたか？」では、エミュレーションがさらに詳しく説明され、収穫逓増の原因としての株式会社を取り扱われる。この章では、スミスの株式会社論についての検討を経て、株式会社の歴史的な制度発展と19世紀の古典派経済学の株式会社論の展開がセットで解説される。キリスト教社会主義者たちは、貧困労働者も株主となることで、社会に広く薄く利益を還元する仕組みとして株式会社の可能性に期待した。ところが、金融資本家が株式会社制度の推進主体であったからか、株式市場は投機的で危険なものになり、労働者のわずかな貯蓄を投資できるものではなくなった。それゆえに、初期の株式会社論が描いた希望は水泡と消えたと言著者は主張する。

第4章「社会的企業の出現：新しい「企業」は可能か」では、市場経済のあるべき姿を取り戻すための一案として、新しい企業形態である社会的企業が言及される。営利企業と同じく命令系統のはっきりしたアメリカ型と、多様な企業形態を持つヨーロッパ型が紹介される。そして、両者のハイブリッド型として日本の社会的企業が2つの具体例とともに紹介される。そして、終章「『国富論』はよみがえるか？」では、ハロッド＝ドーマーモデルを用いて、福祉、教育、環境への投資が経済成長に及ぼす好影響が解説され、社会的企業が新たな社会参加の形を用意することが論証される。

本書で著者が論じようとしたのは、WNから現代の社会的企業につながる貧困根絶という問題意識の連続性である。理論や学説史にとどまらず現代の貧困問題にまで視野を広げる書として、本書は学生に推薦するに値するだろう。

## V 根井雅弘『アダム・スミスの影』[4]

本書はスミスの研究書でも紹介書でもない。「見えざる手」、「市場万能主義」、「自由放任」などの普段光が当てられるキーワードが、どのようにスミスから離れて独り歩きしたかを、著者は様々な経済学者の言説を引用しながら解説している。結果として、20世紀の経済学史の概説書となっている。

第1章「「見えざる手」の魔力」では、価格メカニズムと自由放任が「見えざる手」というキーワードで結びつき、スミスの意図と異なる市場原理主義として独り歩きしていった様子が叙述される。そして、これらを布教したフリードマンやミーゼスなどの見解が検討される。

第2章「[古典派]の多義性」では、「古典派」,「セイの法則」,「自由放任」の三位一体解釈についての検討が加えられる。スラッフアも含む諸々の古典派経済学の重要人物が議論の俎上に載せられ、スミスからケインズに続く経済的自由主義の伝統、および古典派という語義の多義性が議論される。

第3章「経済的自由主義の歩み」では、ニューディール以降の経済的自由主義の変遷について解説されている。福祉国家論などは政府による経済的支援をリベラルな行為と位置付ける。それに反対して、政府からの自由という意味での19世紀的リベラルを守ろうとしたのがハイエクである。人間理性の限界を重視するハイエクの議論とスミスの拡大解釈を検討した後、より過激で無政府主義的なりバタリアンとしてロスバードの議論が紹介される。

第4章「独占を擁護するシカゴ学派」では、独占批判や擁護を巡る現代の多様なフレームワークが紹介される。無数の企業による競争を否定的にとらえ、1980年代の競争政策を支配していたスティグラーを総帥とする産業組織論のシカゴ学派が紹介されている。この学派は、自由競争の行き着いた結果としての独占を容認し、法による独占規制は競争の効率性を阻害すると考えていた。その後には市場の企業数ではなく、競争を引き起こそうとする企業家精神を重視するオーストリア学派が紹介される。

本書は経済学史の講義の参考書として指定する価値がある。完全競争理論だけが競争理論だと思っている学生には特に読書を薦めるべきだろう。また、今回同時に取り上げた井上のエミュレーション論はまさしくシカゴ学派である。自由主義の系譜についても触れられていることから、井上とセットで学生に薦めるとより教育効果が高まるだろう。

## VI 結びにかえて

倫理的な田中は「前期スミス」と「後期スミス」という問題意識から、*TMS* 第6版で追加された議論を規範理論として読み込もうとしている。一方、高と井上は明示してはいないものの、*TMS* 第6版で追加された議論も初版と同じく実証的な心理学の理論として解釈している。*TMS* 第6版の議論が規範理論か実証理論かは3者で理解の分かれるところである。ところが、面白いことに3者には共通点もある。田中は倫理論、高は進化論、井上は競争論からと接近法は違うのだが、新古典派的な完全競争モデルからのみスミスを読み解くことに一石を投じようとする点で3者は共通する。

最後に、4者全員の共通点として、スミスを市場原理主義や自由放任の元祖と位置付ける新しい古典派的読解の否定が挙げられる。誤った言説があるからこそ、それと戦わなければならない。逆説的に言えば、ここで取り上げた4書の存在は、2017年に至っても市場原理主義の旗印としてのスミス像が消えていないことの証拠である。経済学史家以外の一般人にとって、スミスはまだ自由放任の元祖なのである。

(三好宏治：神戸学院大学非常勤講師)